



上■当時の文昌祠。この中に公学校があった
下■現在の文昌祠。学問の神様が祭られていること
もあり、受験生や観光客に人気のスポット

学務官6人が殉職する事件が起きていました。6人は六氏先生と呼ばれ、当時まだ17歳で熊本県出身の、平井数馬も含まれていました。彼らが犠牲を払って示したこの「芝山巖精神」は台湾近代教育の基盤となり、日本の教育界をも刺激、その遺志を継承すべく多くの教師が台湾へ赴きました。哲太郎もその1人だったと考えられます。

台湾で教師になるまで

台湾に渡ったものの、まだ教育制度も定まらず、職を得ることも難しかったため、哲太郎は当面の生活と

台湾語習得のため、台北で酒店を開きます。その後、熊本県出身者が多く住むという台中に向かい、ここでも酒店を始めようと考えます。

初めは台中の伯公坑という場所に居を構えますが、マラリアに冒され危篤になり、大甲の鎮瀾宮にあった台中陸軍衛戍病院大甲分院に運ばれます。マラリアは当時、生存率が30%と言われ、非常に恐れられた病でした。しかし、哲太郎は奇跡的な生還を遂げ、念願だった代用教員の職をこの地で得ます。この時、哲太郎は33歳になっていました。

哲太郎が赴任したのは、文昌祠(学問の神様・文昌帝君を祭った廟)の

敷地内に開校したばかりの大甲公学校でした。

日本統治下の台湾には、台湾に住む日本人の子どものための小学校、台湾人の子どものための公学校、台湾先住民の子どものための蕃人公学校(ばんしんこう)の3種類があり、哲太郎は台湾人の子どもたちを相手に、教師としての仕事を担うこととなりました。

現在、この文昌祠の北側にある公園には、「大甲文昌」の碑があり、「志賀老師・關心大甲衆學子」、「志賀・志賀哲太郎・日本熊本上益城郡人・大甲學校代課教師・為大甲學子殉命・被譽為『大甲的聖人』・有出專書」と、



設置されている大甲文昌の碑

哲太郎が熊本益城の人で、代用教員として大甲の子どものための教育にあたって職に殉じ、

『大甲の聖人』と呼ばれていることが記されています。
このように、大甲では今もなお、哲太郎が愛され、親しまれていることを窺い知ることができます。

待望の教師生活。しかし…

念願叶った哲太郎ですが、ここでまたしても壁が立ちふさがります。

大甲公学校が開校した明治32年(1899年)の台湾の就学率は、台湾全土でも、平均2・04%と非常に低かったのです。

なぜなら子どもは家にとって大事な労働力であり、子どもたちを教育するということに対して、保護者の理解がありませんでした。

このようなことから、大甲公学校が開校してからも数年間は1学年10人程度しか生徒がおらず、日々の出席率も悪く、卒業生も一桁しかいませんでした。

志賀哲太郎